上北だより

２９９号
平成２７年５月１日
練馬区立上石神井北小学校
校　長　市　川　順　康

「桜の寿命」

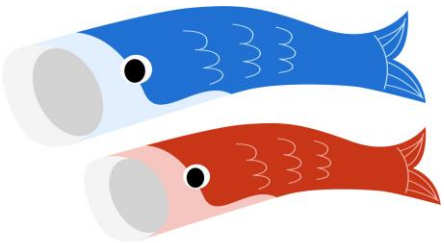
校　長　市　川　順　康

４月に入って、通勤途中の電車の窓から、満開の桜の花の美しさに目を奪われましたが、上北小の今年の桜は、春休みに入り、４月になる前に満開になりました。今はどの桜も「葉桜」になり、初夏の爽やかな風になびいています。古語で「花」といえば「桜」のことをさすほど、日本では古来より、その美しさを讃え、散る姿さえも美しいと感じる日本人の感性が、「桜」を、美しい「言葉」に変えています。

ところで、ある程度時間が経つと、桜の花びらと同時に、桜の木の、いわゆるサクランボの軸になる部分も落ちてきます。桜の花は美しいのですが、花びらや花軸は、花の数以上に地面に落ちます、校庭は、用務主事さんが、丁寧に掃除をしてくださるので、きれいになっていますが、町の中の桜の木の下は、何らかの手入れ（そうじ）をしなければ、それらで汚れた状態になります。川などの水面に浮かぶ桜の花びらを「花筏（はないかだ)」と情緒のある言葉もありますが、あまりにたくさんの花びらや花軸などは、川のよどみにもなってしまいます。また、桜の木には毛虫がつきやすく、毛虫の針で、手足が腫れたりして、注意が必要になる場合もあります。人間を喜ばせるためだけに、花は咲くわけではありませんが、人間にとっては、困ってしまうことにもなりかねないのです。

桜は、人間がその美しさに感嘆している姿とは関係なく、大地から根を使って水を吸い上げ、花を咲かせているのですが、花が終わった後に見せる、違った面に、わたしたちは気付かないことが多いようです。最近では、ソメイヨシノの樹木としての寿命が６０年ということで、桜の名所と呼ばれる場所では、終戦後植えられたものが寿命を迎え、衰弱して枯れてしまうのではないかと心配されています。人間が、桜の花を楽しみたいのなら、桜の花のために手をかけないと、木が弱っていってしまいます。弱り始めて、何も手をかけずにいると、衰退は一層進み、６０年経ったら無残な姿になってしまう、そう考えられています。

桜も植物ですから、「生きて」います。桜は、挿し木で増やせることがよく知られています。植物は動物よりも、自己再生能力がありますから、樹木の寿命は、成育する環境によって大きく左右され、そしてその環境そのものを、人間が作っているわけです。ですから、人間が、桜のために、植えっぱなしにせず、その状態をチェックし、手を入れ続けることが大切です。もちろん、樹木医などの専門家の指示で、時には切りすぎなんじゃないのと思われるくらいに大胆に剪定することも必要になります。



人間も、桜にたとえるなら、花満開の時、葉を落として寒さに耐える時期、剪定される時期など、その成長の過程でいろいろな姿を周りに見せます。上北小の子供たちも、人生のある時期に、満開の桜の花を咲かせ、周囲の人々からあたたかい賞賛の声を聴くことができるよう、そして、実りある人生がより長く続くような人間に成長してもらいたいと願って教育活動をすすめております。子供たちのために、皆様のご支援、ご協力を、引き続き、よろしくお願いいたします。